



 Data	2023-26
監督・脚本: ポール・ヴァーホーベン	
原案: ジュディス・C・ブラウン『ルネサンス修道女物語-聖と性のミクロストリア』	
出演: ヴィルジニー・エフィラ/シャーロット・ランプリング/ダフネ・パタキア/ランベール・ウィルソン/オリヴィエ・ラブルダン/ルイズ・シュヴィヨット	

## 👁️👁️ みどころ

私は韓国の故キム・ギドク監督と同じように、ポール・ヴァーホーベン監督が大好き！『氷の微笑』（92年）、『ブラックブック』（06年）、『エル ELLE』（16年）で見た、あの衝撃、あのシーンは今でもハッキリ目に焼きついている。それは本作も同じだから当然、星5つ。しかして、ベネデッタとは？なぜカンヌが騒然？

愛光学園という中高一貫進学校育ちの私は、キリスト教関連への興味が強く、イエス・キリストの奇蹟の数々を概ね信じている。しかし、ベネデッタの「私はイエスを見た」との告白はホント？彼女が身体に受けたという“聖痕”の真偽は？神秘体験が幅を利かせていた17世紀とはいえ、若くして修道院長の地位と禁断の愛を入手したベネデッタはお見事だが、他方で、猛反発も！しかして、フィレンツェの教皇大使がベネデッタの審問に乗り込んでくると・・・？

ベスト禍における“ロックダウン”という面白い状況設定を含め、ポール・ヴァーホーベン監督の、あっと驚くストーリー作りの才覚はすごい。ラストのこんな展開は誰が予想できるだろう。こりゃ面白い！こりゃ必見！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ベネデッタとは？カンヌ騒然！17世紀の教会は？■□■

ポール・ヴァーホーベン監督と言えば、私はすぐに、第1に『氷の微笑』（92年）を、第2に『ブラックブック』（06年）（『シネマ14』140頁）を、第3に『エル ELLE』（16年）（『シネマ40』31頁）を思い出す。これらは、いずれも物語の中心に女性を据えた名作中の名作だった。そして、2021年のカンヌ国際映画祭を騒然とさせた映画が、暴力とセックスと教会の欺瞞を挑発的に描いた、ポール・ヴァーホーベン監督の最新

作たる本作だ。そして、本作も、そのタイトルどおり、上記3作の系譜に並ぶ修道女を物語の中心に据えたもの。しかして、ベネデッタとは？

ベネデッタ・カルリーニは17世紀に実在した女性で、同性愛主義で告発された修道女だ。修道女を主人公にした映画の代表は、オードリー・ヘプバーン主演の『尼僧物語』（59年）。ちなみに、私が高校時代に7回も観た『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）も、前半は修道女の話だった。しかして、ベネデッタはどんな修道女？

## ■□■神秘体験あれこれ！狂言か奇蹟か？信仰か権力か？■□■

私が中高時代の6年間を過ごした愛光学園はカトリック系の進学校だったから、神父の授業や宗教画を描く授業等があった。また、映画鑑賞は原則禁止だったが、『十戒』（56年）、『ベン・ハー』（59年）、『キング・オブ・キングス』（61年）等の宗教（関係）映画は推薦されていたから、私はすべて鑑賞している。そのため、普通の日本人以上にキリスト教関連の知識を有しているし、どちらかというと、イエス・キリストの存在も信じている方だ。そのため、イエス・キリストが起こした数々の奇蹟はよく知っているが、寡聞にして、ベネデッタが体験したというさまざまな“神秘体験”は知らなかった。また、本作のキーワードになっている、聖痕、臨終の秘跡、苦悩の梨、等も知らなかった。

私は本作の予告編を何度も観たが、そこでは修道女ベネデッタ・カルリーニ（ヴィルジニー・エフィラ）が、「私はイエスを見た！」と叫ぶシーンが印象的だった。しかして、本作には、ベネデッタがイエスとの間で体験したと告白する、さまざまな神秘体験が映像として登場するので、それに注目！私がイエス・キリストの姿をはじめてスクリーン上で見たのは、『キング・オブ・キングス』を観た時。『ベン・ハー』では、イエス・キリストの姿は真正面から見せていなかった。ところが、本作でベネデッタが見たというイエスは、長髪のイケメン。しかも、ある時は、蛇に襲われて危機に瀕したベネデッタを救うため、剣を振るって八面六臂の大活躍をしたり、ある時は偽物のイエスが登場し、ベネデッタを我がモノにしようとしたり……。こんな神秘体験ってホントにホントなの？

ベネデッタは夢で、イエスに「私の花嫁。私の元へ」と呼ばれたため、「自分はイエスの花嫁だ」と信じていたそうだが、それってホント？また、聖痕もホント？本作のチラシには、「狂言か奇蹟か 信仰か権力か」の見出しが躍っているから、そんな論点整理をしたうえで、しっかり本作を鑑賞したい。

## ■□■バルトロメアとの仲は？修道院長の目は？■□■

本作は6歳の時に両親に連れられてテアティノ修道院に入るベネデッタの姿から始まるが、瞬く間に美しく成長し、今は『尼僧物語』でのオードリー・ヘプバーンと同じような敬虔な修道女として、修道院長のシスター・フェリシタ（シャーロット・ランプリング）の下で日々の勤めを果たしていた。そんなある日、家族から逃れるため修道院に逃げ込んできた若い女性バルトロメア・クリヴェッリ（ダフネ・パタキア）を助けたことから、2人は共に修道院で生活することに。修道院での女ばかりの生活がどんなものか、私には大

いに興味があるが、ポール・ヴァーホーベン監督は、その実態(?)を、①お金大好き人間で、まるで“銭ゲバ”のような行動をとる修道院長の姿、②プライバシーがない修道院のトイレで、ベネデッタとバルトロメアが並んで用を足した後、トイレトーパーパー代わりに備え付けの薬を使う姿、等が登場するのでビックリ！

もっとも、それは些細な問題で、本作前半のハイライトは、夢でイエスに「私の花嫁。私の元へ」と呼ばれ、自分はイエスの花嫁だと信じたベネデッタが、そのことを神父に懺悔したところ、神父から「痛みこそキリストを知る唯一の方法」と言われたことを契機に、激しい痛みがベネデッタの全身を覆い、町中に響き渡るほどの叫び声で毎晩うなされるようになったことをどう解釈するか、という問題になってくる。それを見かねた院長は、バルトロメアを同室にして、身の回りの世話をさせたが、ある晩、ベネデッタに聖痕が現れたからビックリ！さあ、院長はそれを信じるの？それとも・・・？修道院長の目は如何に？

### ■□■修道院長に抜擢！権力も禁断の愛も、両方ゲット！■□■

イエス・キリストの「復活」をはじめとする奇蹟の数々は聖書や福音書の中で語られ続けているから、「それはきっとホント！」と思える可能性が高い。しかし、1617年にベネデッタが受けた（と主張する）聖痕の真偽は？

修道院長はそんなベネデッタの姿に疑いの目を向けていたが、聖女として民衆から崇められ、司祭の前でも奇蹟を起こしたベネデッタを、司祭はシスター・フェリシタに代わる新たな若き修道院長に任命したからすごい。これによって、ベネデッタは、テアティノ修道院における権力と、バルトロメアとの“禁断の愛”の両者をゲットしたから、しばらくは“我が世の春”を謳歌することに。しかして、本作では、ポール・ヴァーホーベン監督が演出する、大胆な女同士の“禁断の愛”の生々しい生態(性態)をタップリ堪能したい。

ところが、翌1618年、修道院の上空に“神からの警告”と意味される彗星が出現すると、以前からベネデッタに疑惑と嫉妬の目を向けていた元院長の娘シスター・クリスティナ(ルイーザ・シュヴィヨット)の身に“ある悲劇”が起きるので、それに注目！これらはすべて、ベネデッタの仕組んだもの・・・？

そこで、シスター・フェリシタとシスター・クリスティナは、ベネデッタの悪魔のような所業を教皇大使ジリオーリ(ランベール・ウィルソン)に訴えるべく、教皇大使のもとに向かったが、2人がそこで目にしたのは、町中ペストの死体で溢れかえる姿だった。その惨状の中で、2人からベネデッタのインチキ性をタップリと聞かされた教皇大使は、ベネデッタを糾弾すべくペシアの町に向かったが、さあ、ベネデッタはどうなるの？

### ■□■教皇大使の権力の行使は？ベネデッタへの審問は？■□■

韓国のキム・ギドク監督の映画もあっと驚く(どぎつい?)展開が特徴だったが、ポール・ヴァーホーベン監督の映画もそれと同じ。『水の微笑』でシャロン・ストーンが妖艶に見せてくれた“足の組みかえシーン”には全世界の男たちが生ツバを飲み込んだはずだ。また、『ブラックブック』で見せた、終盤20分のハイライトには、とにかく驚かされた(『シ

ネマ14』140頁)。さらに、『エル ELLE』での、ハリウッド女優が軒並み尻込みしたレイプシーンへのフランス人女優、イザベル・ユベールの挑戦（＝度胸の良さ）にもびっくりさせられたが、その演出をしたのはあくまでポール・ヴァーホーベン監督だ。

しかして、本作では元院長シスター・フェリシタとその娘クリスティナの訴え（讒言？）を受けて、ベネデッタを糾弾するべくペシアの町を訪れた教皇大使は、既に棺に入り、天に召されてしまったベネデッタの姿を目の当たりにしてビックリ！続いて、自らが行ったベネデッタの葬儀のミサの最中に、突然「天国から引き戻された」とベネデッタが目覚ましたから2度目のビックリ！イエス・キリストの復活はきっとホントだろうが、聖女ベネデッタ、修道院長ベネデッタにも、イエスと同じような“復活”がホントにあるの？さらに、その場でベネデッタが「大勢の人がペストで死ぬ」とキリストからの預言を伝えたから、教皇大使のビックリはついに3度目に。

それはそれとして、本作では教皇大使が翌日から開始した、ベネデッタとバルトロメアの女同士の情欲についての審問風景に注目！もっとも、当時の審問は、近代刑法に基づく現在の裁判とは全く異質のルール。つまり、そこではバルトロメアから女同士の同性愛についての“自白”を拷問によって引き出すのが当然のルールとされていたわけだ。私が本作ではじめて目にした、女性に対する拷問器具が“苦悩の梨”。これは洋梨の形をした拷問器具で、口や肛門、膣などの器官に器具を挿入し、ねじを巻くことで器具を広げ、内部から器官を破壊するものだから大変。その対象になったのは、魔女や同性愛者、神を冒流した異端者などで、器具が広げられていく途中で痛みに耐えきれず自白する者も多かったそう。

そんな拷問を生身の体で受けさせられたバルトロメアが（あっさりと？）ベネデッタとの情欲を自白してしまったのは仕方ない。しかも、教皇大使が探し求めていた、女同士の同性愛に不可欠な道具として使っていたマリア像の在り処まであっさり（？）自白してしまったから、ベネデッタは万事休すだ。下手するとエロ・グロ・ナンセンスのピンク映画になりかねない、そんなストーリーを、ポール・ヴァーホーベン監督は何とも見事な芸術作品に仕上げているので、その手腕に注目！

教皇大使が下したベネデッタに対する判決は有罪。その結果、火刑の刑はすぐに執行されることになったから、さあ、本作ラストは、ジャンヌ・ダルクの火刑と同じようなものに・・・？

## ■□■ロックダウンは誰が指示？ペスト禍は？民衆の反乱は？■□■

3年間も続いたコロナ禍がやっと収まってきたのは幸いだが、最初に見た中国・武漢のロックダウン風景には全世界が驚かされた。しかし、本作を見ていると、17世紀に蔓延したペスト禍を逃れるため、テアティノ修道院の院長たるベネデッタがペシアの町のロックダウンを明示、それによってペシアの町がペストから救われる姿が登場するので、それにも注目！

もつとも、フィレンツェからペシアを訪れた教皇大使は、自らがロックダウンのとばかりを受けたことに激怒。そのあまりの凄まじさに負けた門番はシスター・フェリシタとクリスティナを含む“教皇大使ご一行様”が町の中へ入ることを許してしまったが、ある日、シスター・フェリシタがペストにかかってしまったからアレレ。さらにその後、教皇大使自身にも体の異変が！まさか、教皇大使もペストに・・・？

そんな状況下、ベネデッタは火刑台に向かうことに。そして、まさに今、火がつけられてしまったが、そこから起きる、あっと驚く本作ラストの大騒動はあなた自身の目であり！ジャンヌ・ダルクは火あぶりの刑で死んでしまったが、さて、ベネデッタは？

2023（令和5）年3月3日記